ドレイクのカディス襲撃
―スペイン艦隊総司令官メディナ・シドニア公―

岩　根　圀　和

1.

スペインはアンダルシア地方の港町カディス沖合に27艘のドレイク艦隊が姿を現したのは1587年4月29日の正午ごろであった。誰も不審を抱かなかったのは他でもない、時あたかもイギリス遠征の艦船が続々と集結している最中であり、マルティネス・デ・レカルデ隷下のビスケー艦隊が到着したと思ったからである。しばらくして午後の海風に乗って湾口へ急速に接近してきたドレイクの旗艦「エリザベス・ボナベンチャー」の大砲が突然に火を吹いた。のんびりと荷物の積み卸しに余念のなかったカディス湾内を一発の砲声が騒乱のるつぼにたたき込んだ。続いてカディスの町に衝撃が走り、市民を恐慌の淵に陥れたのである。まさに急襲であった[1)]。イギリスの動きをスペインが察知していなかったわけではない。「イングランドからの真実の報告」によれば、3月27日にドレイクの艦隊10艘にエリザベス女王から乗船命令が下っている。完全武装の船がテムズ河口を出てファルマスへ向かい、40から50艘と合流してプリマスへ入る模様である。兵員は3000名ぐらいであるから上陸攻撃できる数ではない。だとすれば新大陸から帰還するスペイン船団を襲うのであろう。ロンドンのスパイからドレイクの不穏な動きがそのように報告されている。4月10日の報告では、ドレイクはまだプリマスを出港していないと知らせてきていたが、4月20日のロンドンか

らのパリ駐在大使ベルナルディーノ・デ・メンドサへの報告には「4月11日（グレゴリオ暦21日）に34艘で出港」とある[2)]。しかもカディス攻撃が目的ではないかと推測している。さっそく急使が放たれるが、普通ならパリからマドリッドへ11日足らずで着くはずのところが、このときに限って遅れて4月30日に届いた。カディスは時すでに恐慌のまっただ中である[3)]。イギリス側にも若干の手違いがあった。リスボンとカディスに集結している艦船に被害を与えてイギリス遠征を妨害すべきだと主張するドレイクの作戦に同意してエリザベスは出撃許可をあたえた。しかし時を同じくしてフランドルのオステンデでバーリー卿ウイリアム・セシルとパルマ公アレハンドロ・ファルネーゼとの間に会見が実現し、和平交渉が緒に就いたのである。その矢先にカディスへの武力攻撃はいかにも不都合である。状況の悪化を憂慮する枢密院から女王陛下の名において急遽、ドレイクにあてて命令変更が下達された。

「女王陛下の名において貴殿に伝えるようにとの指令があった。陛下の意志は、貴殿がスペイン国王の港湾つまり停泊地を攻撃しないよう、港湾内に停泊中の船舶や町に武力攻撃を行わないよう、陸地にていかなる敵対行為をも行わなぬようにとのことである。しかしながら、貴殿とその配下の者たちが、（キリスト教徒の血を流すのをさけて）東あるいは西インド諸島へ向かう船、あるいは上記の地点からスペインへ帰還するスペイン国王の船舶を洋上にて拿捕するのを望んでおられる。船舶を確保して船体を無傷のままイギリス領土へ搬送すれば陛下の喜びはいっそう大きなものとなり、貴殿への支持も高まるだろう。1587.4.11[4)]」

当初の指令では、女王陛下の領土に対して成されるいかなる企てをも阻止して排除すること、とりわけスペイン国王の艦隊集結を阻むことに

なっていた。しかるに和平交渉の成立を願うエリザベスは、通常どおりの私掠船の許可は残したものの、スペイン領土への攻撃許可を撤回してドレイクの動きを封じたのである。だがこの指令はすでに出撃してしまっていたドレイクには一足違いで届かなかった。ドレイク艦隊の後を快速船を仕立てて追わせたが、あいにくの逆風に阻まれて追いつけなかった。たとえ追いついたとしてもドレイクがこの命令におとなしく従ったかどうかは議論の分かれるところであるが、イギリス側の回避努力にもかかわらずカディス襲撃は起こってしまったのである。いずれはドレイクが襲撃してくると予想していたフェリペ2世だが、メンドサ駐仏大使に「プリマスに集結していた艦隊だとすれば迅速なことである」と皮肉っぽく述べているところを見ると多少の油断はあったのだろう[5)]。一方、ドレイクは友人ジョンにあてた簡潔な手紙に弾むような筆致で得意げに戦果を報告している。

「友人である君に知らせておこう。19日（グレゴリオ暦29日）にカディスに至り、イングランド遠征準備を整えた大型船を発見して32艘に火を放ち、大型商船（1000トン）を1艘沈め4艘を曳航した。2日間停泊し、その間にスペイン国王のガレー船12艘がばらばらに攻撃を仕掛けてきた。2艘を沈め、他を撃退し、被害はほとんどなかった。とは言え陸地からの砲撃が激しさを増し、多数の軍勢が援助に駆けつけてきた。しかしこちらの目的はイギリス海峡へ来る艦隊の集結を阻むことにあった。この成功の報を本状の持参者とともに送る。1587.4.27（ユリウス暦）[6)]」

もう少し詳しい戦況についてはドレイク艦隊の副提督フェナーから国務長官フランシス・ウオルシンガムへの報告が参考になる。これによる

とドレイク艦隊が湾内へ侵入したのは4月19日（29日）、日没1時間前であった。ただちにガレー船7艘が迎え撃ったが歯が立たないと見てまもなくもとのところへ撤退していった。カディス要塞付近の停泊地には小舟のほかに船舶が60艘いたが、そのうちフランス船20艘ばかりがプエルト・レアルへ避難した。中立国であるフランスの船舶に手出しは厳禁であるから見送るしかないのだが、それに紛れて逃走するスペイン船を浅瀬が邪魔になって阻止できなかった。不案内な港で大型船が無闇と動き回るのは禁物である。しかもプエルト・レアルは陸地へ向けて深く切れ込んだ湾となっているのでなおさらうかつには近寄れない。至近距離からの砲撃で1000トンばかりの大型商船を沈めた。こうして38艘を拘束した頃には夜の帳がおりて動きを封じられてしまったと言うのである。

「翌日、サンタ・マリア港からガレー船が2艘、ポルト・レアルからもう2艘がやってきたが火薬と砲弾の無駄遣いである。スペインが差し押えていたオランダ商船20艘のうち14艘を焼却、6艘はプエルト・レアルへ逃避した。サンタ・クルス侯の所有であるカラック船1400トンも焼却した。大型ビスカヤ船5艘にも火を放った。そのうちの4艘はリスボンへ運ぶ食料を積載していた。残る1艘は1000トンほどでインディアス（新大陸）へ向けて運ぶ鉄、大釘、鋲、鉄タガ、馬鋤などを積載していた。300トンほどの運搬船が3艘いたが、これもイギリス遠征用

のビスケットを満載していた。1 艘は半分ほど積み込んだところだったがこれを焼却し、他の 2 艘は曳航した。放火、沈没、曳航した船舶は 38 艘、概算で総計 13000 トンになろう。カディス湾の奥へ逃走したのは別としてプエルト・レアルへ逃げたのは 40 艘ほどであったと思われる。われわれのいた間、敵はガレー船、要塞、海岸から砲撃を加えてきた。海岸では適当な位置へ絶えず大砲を移動させて撃ってきた。こちらも絶えず撃ち返して追い払った。熾烈な砲撃はこちらには楽しいものであった。…ガレー船が追跡して砲撃してきたが子供の遊びみたいなものだった。風が落ちたので海岸寄りに向かってカディスから 1 リーグに投錨した。ガレー船は浮かんでいるだけだった。…ガレー船と戦闘をおこなったが、女王陛下の 4 艘は、たとえ 1 艘で孤立していてもガレー船 20 艘を相手にして問題がないと確言できます。われわれはすべて司令官（ドレイク）に愛情を抱き、全艦隊が一丸となっております[7]。」

戦果の数字については勝った方が大げさに言う傾向があるのでそのまま信じるわけにはいかないが、イギリス遠征準備の物資集積地であったカディスにかなりの混乱を引き起こしたことは間違いない。ただ注目すべきは、ガレー船の砲撃を子供の遊びみたいなものだと一笑している点である。櫂で動くガレー船は、風のない湾内では機動性を生かせて有効に攻撃できる花形の戦闘艦のはずである。しかしドレイクの旗艦「エリザベス・ボナベンチャー」と対峙するとき 100 トン足らずのガレー船からすれば相手は 600 トンを越える巨艦である。しかも舷側の低いガレー船から眺めればそびえ立つ要塞のごとき堅牢さであろう。ガレー船の船首に固定装備されている大砲は人間殺傷用の小型砲でしかない。逆にガレオン船の舷側砲が至近距離から命中すれば虚弱なガレー船などひとたまりもなく木っ端微塵に砕け散ってしまう。衝角をぶつけて相手の動き

を封じてから戦闘員が乗り移って白兵戦を演じるのがガレー船の常套戦術であるが、600 トン、800 トン、場合によっては 1000 トンを越すガレオン船が相手では衝角など蟷螂の斧にも等しい。乗り移れないどころか遮蔽物のないガレー船の戦闘員は、頭上から容赦なく火縄銃の射撃を浴びるだけである。浮いているだけで手も足も出ないとはまさにこのことである。1 艘でガレー船 20 艘を相手に出来ると豪語するフェナーの報告は、誇張でも何でもない実感であったろう。大西洋の海戦にもはやガレー船の出る幕はなかった。イギリス遠征の艦隊に含まれていたガレー船 4 艘が、嵐に阻まれてイギリス海峡へ入ることすらできなかった事実がそれを証明している。

2.

　被害を受けたスペイン側には、はるかに詳細な記録が残されている。32 艘に火を放ち、大型商船を 1 艘沈め、4 艘を曳航したとドレイクは自ら記しているが、数字において彼我に若干の相違が見られるようだ。スペイン側の被害記録は次のようである。

「マラガからのウルカ 3 艘、ビスケット 3, 443 キンタル（x 100 kg）を積載。一艘を焼却、2 艘を 2, 000 キンタルとフランドルの水夫を乗せたまま拿捕。
400 と 200 トンのウルカ 2 艘、ぶどう酒の大樽 392 パイプ（x 447 L）。これらを焼却。
ポルトガル船 1 艘、小麦 3, 288 ファネガ積載（x55. 5 L）。これを焼却。
レバント船 1 艘、600 トン、沈没。イタリアへ臙脂、皮革、羊毛その他を運ぶ予定だった。
ビスケー船 1 艘、新造船、鋼材 200 キンタルと他の商品を焼却。

サンタ・クルス侯所有のガレオン船 1 艘、焼却。
ヌエバ・エスパーニャ船団の船 4 艘。これらを焼却。積み荷なし。
ポルトガル船 1 艘、ブラジルへ向けてぶどう酒、その他の商品を積載。焼却。
ウルカ 5 艘、4 艘は積み荷なし、1 艘は塩を積載。焼却。
干しぶどうと糖蜜を積載した荷船 1 艘を拿捕曳航。
ぶどう酒と他の商品を積載した荷船 1 艘を拿捕曳航。
ぶどう酒と臙脂を積載したフランス船を 1 艘、拿捕曳航。
ぶどう酒と他の商品を積載してビスケーへ向かう予定の船 1 艘を拿捕曳航。
セビーリャへ向かう予定のビスケー船からマスケット銃 200 丁を奪取。
フランス船 1 艘が傾斜。

合計 23 艘。そのうち 18 艘を焼却。6 艘を拿捕曳航。総被害額 172, 100 ドゥカード。内 17, 426 ドゥカードが国王の所有、他は個人財産[8)]。」

カディス襲撃の目的はそこに集結している艦船と物資を破壊損傷してリスボンからの出撃を阻み、スペイン侵略の恐怖を取り除くことにあった。イギリス本土へ大挙して押しかける艦隊を海峡で阻止するには敵と同等以上の戦力を必要とする。しかしスペインの港に停泊している敵に先制攻撃をかけてこれを封じ込めるなら、はるかに少ない戦力でより大きな効果を挙げることができる。そのように説得してドレイクは、エリザベス女王から 3 月 25 日の出撃許可を引き出したのである。だがフェリペ 2 世に報告された被害項目のリストを一目すれば瞭然としているが、イギリス遠征艦隊に深刻な打撃を与えるほどの損傷ではないのがわかる。直接関連するのはビスケットとぶどう酒ぐらいであろう。沈んだ船や曳

航されたのはほとんどが小型の荷船（ウルカ）と商船23艘であり、しかも海岸寄りの浅瀬へ逃れたり、プエルト・レアルへ無事に難を避けた船は倍近くの40艘にのぼっている。サンタ・クルス侯の戦艦であるガレオン船が1艘被害に遭っているのはまだ武装が整っていなかったからである。

ドレイクは友人である牧師フォックスへ「イギリスの進撃にそなえてスペイン国王は早急な準備が出来ないばかりか、大きな艦隊も期待できない[9)]」と述べているように自信満々であった。しかし上記の報告書を見たフェリペ2世はベルナルディーノ・デ・メンドサへ「しかし…カディス事件の報告を見ればイングランドがいかにも大仰に吹聴しているのが分かるであろう。次の便ではサンタ・クルス侯の出撃を知らせることが出来ると思う[10)]」と冷静な判断を書き送っている。ドレイクの自信は確かに大仰である。どう見てもイギリス遠征作戦が頓挫するほどの被害ではなかった。むしろフェリペ2世の怒りを掻き立て、遠征作戦の実施に拍車がかかったのだから皮肉である。確かにフェリペ2世の髭を焼いた事件であったかもしれない、しかし焼けた髭はすぐに生えると言われるゆえんである。

湾内の船舶に火の手があがったとき、カディス市街に恐慌が走ったことを忘れてはならない。私邸にいたメディナ・シドニア公のもとへカディス敵襲の急報が届いたのは夜の10時を過ぎていた。夫人が女児を出産した3日後であった。ただちに近隣の町に警報を発して兵員をカディス湾へ向かわせ、自分は寝静まった村々を駆け抜け、家臣と共に最短距離の道を選んでカディスの町へ馬を駆った。遠望する夜明けの港は燃え上がる船の火炎で明けに染まっていた。イギリス兵の上陸に備えてメディナ・シドニア公は、湾を迂回してスアソ橋に堡塁を築いて大砲を配備する。カディスへの主要道路を押さえる要衝である。敵が上陸してくる

恐れのある地点に麾下の兵士を配置につかせ、もっとも危険なプンタル岬には巨砲を引き出して数百の兵士と共に配備する。メディナ・シドニア公の指揮のもとに、敵船の移動に応じて適宜、有効と思える位置へ大砲を移して防御に努めたのである。フェナーが報告書で、敵は要塞、海岸から砲撃を加えてきた。海岸では適当な位置へ絶えず大砲を移動させて撃ってきたと記しているとおりである。その甲斐あってドレイクは上陸をあきらめ、翌日の朝には戦利品を満載して港外へと去って行った。メディナ・シドニア公の機敏な行動と的確な対応のおかげで敵の上陸を食い止めることができたのである。そして近辺の港は言うに及ばず、ただちに新大陸へも緊急警告を発して警戒を促し、ドレイク艦隊の航跡を追尾することも忘れなかった。残念ながら恐慌に陥った婦女子が町の要塞へ逃げ込もうとして24人ほどが押しつぶされる事故が起きた。これを指してメディナ・シドニア公の対応に手抜かりがあったからだと非難中傷しておとしめようとする声がフェリペ2世の耳に届いていた。めったに感情を面に表すことのなかったと言われるフェリペ2世がメディナ・シドニア公への書簡に珍しく怒りをにじませている。

「カディス市が貴殿に不審を抱いているとのこと。貴殿の救援活動がかくも反対の結果をもたらした理由があるのだろうが、余はつねに貴殿の尽力に満足しているし、常に慎重に熱意と愛をもって奉仕してくれていると承知であるのを貴殿も理解しているであろう。余がすべてに確信と満足を抱いているのだから何も気に病むことはない。何らの支障も生じないと思う。逆のことを余に信じ込ませることは何人にもできないのである。また当市ならびに総督には写しに見られ通りの書簡を送っておく。カディス救援のため貴殿が家をあとにして省みず、ひたすら尽くしてくれた努力をかくも早々と忘却してしまうとは驚くべきである。なん

らの根拠もないのであって気にすることはない。むしろ今後は、余が払っているのと同じに、貴殿に対して相応のしかるべき敬意を払うであろう。1587. 5. 24 [11)]」

心ない一派の中傷を一蹴し、メディナ・シドニア公の要を得た働きを弁護称賛して絶大の信任を寄せ、異例とも言えるほど感謝の心情に満ちた書簡である。メディナ・シドニア公が「アンダルシア沿岸警備総司令官」に任命されたのはこの時である。

3.

カディスを急襲したドレイク艦隊はその後どこへ向かったのか。メディナ・シドニア公の放った追跡船と陸地からの監視でその航跡は把握されている。今その詳細について触れる必要はないが、大まかに言って沿岸の町や要塞を脅かしながらリスボンからサン・ビセンテ岬の海域を 5 月から 6 月末まで遊弋して 7 月 6 日にプリマスへ帰港している。その意図は言うまでもなくイタリアから回航されてリスボンへ集結してくる艦隊の針路を阻むこと、ならびに新大陸から金銀を満載して帰還する船団を襲うためであった。イギリスからの報告では帰還したドレイクが再度出撃する動きのあることを匂わせている。

「本月 6 日、ドレイクは、ブラジルやカリカットからの帰還船とスペインの海域で拿捕した船ならびにスペインとポルトガルの港から拿捕した船の合計 11 艘を連れてプリマスへ到着した。捕獲船はあわせて 500 万ドゥカードに上るとドレイクは女王に報告している。ドレイクは 16 艘を率いてスペインへ戻り、西インド（新大陸）からの艦隊を襲撃するのに必ず間に合うと言う [12)]。」

ナポリ、シシリーから来る艦船には難を避けて途中のジブラルタルへ入って様子を見るようにとの指令が届いているのでさほどの心配はない。問題は新大陸から帰還してくる財宝船である。イギリス遠征費用のほとんどを新大陸からの金銀に負っているスペインとしては、これを拿捕されると膨大な戦費をまかなうことが出来なくなってたちまち作戦遂行に頓挫を来すのは目に見えている。カディス襲撃などとは桁違いの被害である。新大陸船団の警護にフェリペ2世が必至となるのも当然であろう。もちろんメディナ・シドニア公が新大陸へ急使を派遣して充分な警戒を促してはいるがすれ違いになる恐れもある。もしまた洋上でドレイク艦隊と遭遇して襲撃されれば、わずかな護衛船団では守りきれない。スペインのなすべきはリスボンからサンタ・クルス侯麾下の艦隊を一刻も早く出撃させ、ドレイク艦隊を駆逐掃討して海上の安全を確保するか、あるいはドレイクよりも先に財宝船団と合流してこれをスペインにまで導くことである。ところがリスボンに艦船はあっても充分な戦闘員がそろっていない。大西洋艦隊総司令官サンタ・クルス侯は出撃できないままにいる。そこでフェリペ2世は、アンダルシアの諸侯から5200名の兵員を徴募できる目処がついているので、そのうち取り急ぎ2200名を召集して急遽リスボンへ出発させるようにメディナ・シドニア公へ指令を下す。しかも海上を運ぶと風向きに影響されたりドレイクの妨害も想定されるから安全確実な陸路を選ばねばならない。

「最短距離のリスボンへ到達できる道を選んで一刻も早く指令を下してもらいたい。…重要であるから再度申し伝えておくが、くれぐれも迅速に行ってもらいたい。アランフェス、1587.5.23[13)]」

「くれぐれも迅速」に行うのはメディナ・シドニア公の役目である。フェリペ2世の代理としてアンダルシアの諸侯からこれだけの兵員を徴発できる人物は、スペイン随一の公爵であるメディナ・シドニアをおいて他にないのである。これ以後、メディナ・シドニア公のもとへ矢継ぎ早に指令の書簡が届く。

「本月25日の書簡からシシリーの歩兵部隊とアンダルシアでの徴募兵を一刻も早くリスボンへ送り、サンタ・クルス侯がイギリス艦隊へ向けて出撃できるようにするのが肝要であると承知であろう。…イギリス艦隊はサン・ビセンテ岬へ向けて移動し、アンダルシア艦隊との合流を阻止する意図であるのがはっきりしている。リスボン艦隊を襲撃する恐れはないので、人員さえ整えば出撃して合流できる機会である。イタリアとアンダルシアの人員を出来るだけすみやかに陸路をリスボンへ送らねばならない。言うまでもあるまいが、これは極めて迅速な行動を必要とするのである。…出来るだけ多数の人員を召集して送るように。…出来るだけ迅速に急いでなされるように。早くリスボンへ到着できれば、サンタ・クルス侯が早急に出撃して油断している敵海賊に攻撃を加えることが出来るのである。1587.5.29[14)]」

イギリス遠征艦隊に乗船する兵員をイタリア、ドイツの歩兵部隊から補充する予定になっている。精鋭部隊を乗せてすでにシシリー、ナポリから出港している艦隊の到着が待たれているのだが、カディスへ入るのは危険であるからナポリ部隊をジブラルタルで上陸させ、そこからやはり陸路をリスボンへ向かうよう指令がでている。

「新大陸船団の安全を図るためにはリスボンからのサンタ・クルス侯

の出撃がこれ以上遅れない方がよい。そこでサンタ・ガデア伯爵がシシリーからの部隊をアヤモンテに上陸させ、貴殿の派遣するセビーリャからの二部隊も遅滞なくそこへ到着するよう出来るだけ迅速にリスボンへ向けて出発するのがよろしい。…これらが予定通りに到着しなければ、ガレー船の通常兵士あるいは新規の徴募兵やアンダルシア諸侯からの兵員から上記の 2500 名を確保して最短距離を派遣するよう努力して貰いたい。その重要性を考え、出来るだけ迅速に行軍するように指令を下して貰いたい。早く到着すればそれだけサンタ・クルス侯の艦隊出撃が早まってより大きな効果が期待できるからである。…艦隊が出撃出来る場合、食糧を積載するウルカの到着をマラガで待つ必要はない。食糧はあとから運搬されるだろう。艦隊が早急に出撃できるよう歩兵部隊は陸路をリスボンへ向かうことを命じておく。このような重要事にあって活用すべき手段は全面的に利用してよろしい。1587. 6. 10 [15]」

食糧は後回しでいい、国王の命においてあらゆる手段を最優先に駆使してまず兵員をリスボンの艦隊へ遅滞なく届けることがメディナ・シドニア公へ下された至上命令である。「出来る限り迅速に」という言葉がフェリペ 2 世の書簡に執拗なまでに繰り返されているのが分かるであろう。遠くのマドリッドにいて焦りを募らせるばかりの国王にしてみれば幾ら繰り返してもまだ言い足りない思いであろう。カディスに集結したアンダルシア艦隊の出撃も同様に急がせる。

「本状が届き次第、即刻上記艦隊の出撃を整え、ガレアサが到着すれば時を移さず出航して貰いたい。ガレアサの到着がない場合は、集結している艦船だけ、つまりスペイン艦船 15 艘、シシリー艦船、ウルカ、パタチェ（小船）ですぐに出航して貰いたい。サン・ビセンテ岬へ向か

い、そこからまっすぐリスボンへ回航してサンタ・クルス侯の艦隊へ合流する。先にも述べたが、すでにリスボンを出ていれば貴艦隊を求めて沿岸をサン・ビセンテ岬へ向けて航行しているはずである。サンタ・クルス侯と遭遇した時点で必要な艦船と兵員を渡し、すぐにもリスボンへ向かい、港の守りを固めること。それには迅速な行動を必要とするのでくれぐれも注意を要する。報告を頼みます。マドリッド、1587.7.5[16)]」

これだけメディナ・シドニア公をせっついてリスボン艦隊への兵員確保とカディスにいるアンダルシア艦隊の準備出撃を急がせた結果、サンタ・クルス侯の艦隊は7月14日にやっとリスボンを出港して新大陸船団の安全警備につくべくアゾレス諸島へ向かうことができたのであった。このアンダルシア艦隊は7月末にはリスボンへ帰港し、ナポリ艦隊もカディスへ到着してリスボンへ回航された。しかしドレイク艦隊は7月6日にすでにイギリスへ戻っていたのだが、フェリペ2世は7月16日になるまでそれを知らなかった。いずれにせよ艦隊配備をやっと終えて安堵の胸をなぜおろしたフェリペ2世は、メディナ・シドニア公へ「リスボンへの部隊の陸路派遣とアンダルシア艦隊の出撃とに同時に携わっているのだから大いに感謝している」と述べ、さらに「艦隊の艦船数、戦闘員と水夫の数、大砲、武器、弾薬、装備がすべて滞りなく準備されたことをうれしく思う。貴殿に任せておけば、そのように意を尽くして奉仕してくれると安心していた。感謝する。」と労をねぎらっている。だが任せられたメディナ・シドニア公にしてみれば、これは想像を絶する激務であったことは想像に難くない。兵員の徴募、大砲の確保、火薬の調達、そして食糧の備蓄などそのどれひとつをとってみても一筋縄でいく仕事ではないのである。それをほぼフェリペ2世の指令どおりに恙なくこなしていったメディナ・シドニア公の管理能力には驚くべきものが

あると言わねばなるまい。フェリペ2世がしきりと感謝をしているのはもちろんとして、国務長官イディアケスやモウラなどの主立った人物たちもメディナ・シドニア公が見せた管理手腕の完璧さを目の当たりにして信頼度をさらに密にしたようだった。

4.

ドレイクが姿を消し、厳戒態勢が解かれて通常の警備へと戻った。リスボンに集結した艦隊はイギリス遠征に向けてさらに兵員と装備の充実がはかられる。カディス襲撃の教訓を踏まえてフェリペ2世は、早急にイギリスへ武力攻撃をかけなければならないと思うようになっていた。スペイン沿岸を荒らすイギリス海賊も目障りだが、それ以上に新大陸からの船団を狙って出没する海賊の被害が大きい。フランドルの反乱軍を援助するエリザベスの政策にも異論がある。災いの根源を絶つべくフェリペ2世は、サンタ・クルス侯にスペイン艦隊の出撃をしきりと急がせるのである。冬場の出港を嫌ってなかなか動こうとしないサンタ・クルス侯とマドリッドで苛立ちを募らせるフェリペ2世との軋轢が高まるうちに年が明けて2月、サンタ・クルス侯が重態に陥った。そして1588年2月9日にスペイン大西洋艦隊総司令官サンタ・クルス侯の死去が報じられたのである。頑固一徹な62歳の老将をフェリペ2世はすでに見限っていたようなところがあり、重態の報に接すると急遽、後任の選定に入った。スペイン周辺にまたしてもイギリス艦隊の姿がちらつき始めていたので後任の選定に急を要する状況でもあったが、国王は躊躇なくメディナ・シドニア公に白羽の矢を立てたのっだった。スペイン随一の裕福な貴族なので財力に問題はない。地位もあれば人望もあり、37歳と若い。すでに述べてきたように艦隊の編成はもとより遠征に不可欠な兵站部について誰よりも詳しい。なによりもその素晴らしい管理能力に

は、フェリペ2世を初めとして誰もが感服しているのはすでに述べた通りである。権勢を誇る国務長官イディアケスにしてもメディナ・シドニア公を総司令官の任に就けることに異論はなかった。であればその他の誰からも不服の出るはずがなく、この人選に疑義を呈する者は愚か危惧を抱く者も宮廷にはなかった。もちろん反対する者は誰ひとりいなかったのである。ただメディナ・シドニア公本人だけが、枢密院から届いた次の書面を前にひとり憮然としていた。

「リスボン艦隊の準備が大いに整い、ほとんど乗船が終わって本月中旬あるいはその近い日時に出撃を期待されていたところが、サンタ・クルス侯が重体に陥った。様々の理由から艦隊出撃を遅らせることはできないので（極秘ながら)、サンタ・クルス侯の回復が見込めないとの判断のもとに陛下は、艦隊指揮を貴殿に託することになされた。ついてはパルマ公ならびにその軍勢と協力なし、お互いの勢力をもってイギリスに遠征して神と陛下への奉仕に努めていただくことを期待するものである。陛下の現在望まれるところは、上記について貴殿が状況を理解のうえしかるべく決意をなされることである。別途指令のあるを待って（サンタ・クルス侯の病状次第だが)、極秘のうちに万難を排して出発の支度を調え、ガレオン船に乗船してリスボンへ向かい、そこから貴殿が全艦隊を指揮して指令に従って出撃するよう陛下は希望されている。遠征全般に関わる指令書は間に合うように届けられる。何よりも重要なのは、新大陸へ向かうとの口実で兵員を急遽ガレオン船に乗船させ、別便のあり次第出撃することであると理解されたい。1588. 2. 11 [17]」

これはもう命令に近い要望であろう。引き続き追いかけるようにしてフェリペ2世からの書簡が届く。

「11 日の書簡でサンタ・クルス侯の病状悪化を承知であろう。大きな損失となるサンタ・クルス侯の死去を知った現在、艦隊のすべてを把握している貴殿を確信をもって大西洋艦隊総司令官に任命する次第である。一刻も早い出撃準備がなされてすぐにも出発されるべくこの任務を知らせたかったのである。まずなすべきは余が集結させた艦隊の総司令官の任に着き、神の加護と貴殿の尽力によって、充分な配慮のもとに出撃させることである。緊急性が必要であるのでここ 8 日から 10 日の間に水夫と兵員ならびにその他の必要物資を積載したガレオン船を率いて海上をまっすぐリスボン河口へ向かい、そこへ猶予なく全勢力を集結することを命じる。ガレオン船がそれほどすみやかに装備を調えて出帆できなければ、艦船の出帆はディエゴ・デ・フローレスに任せ、貴殿の身体にさわらぬ程度でだが陸上を馬車でリスボンへ行ってもよろしい。陸を行くか海上を行くかの選択は貴殿にまかせるが、書簡の宛先に困るのでどちらを選んだのかはすぐに知らせてくれるよう。1588. 2. 14 [18]」

出撃するばかりになっている大艦隊を片時たりとも放置するわけにはゆかない。有無を言わせぬ威圧的な文面である。メディナ・シドニア公は、国家存亡の重要な作戦の責任者として自分に白羽の矢が立てられたことに一応の感謝を示しながらも、おずおずと断り状を認(したた)める。ただし宛先は間接的に国務長官イディアケスへの親展である。

「このような重大に任務に際して小生をご指命くだされたのを身に余る光栄と感じて陛下の御手とおみ足に口づけをいたします。完遂すべき奉仕に必要な資質と活力を持ちたいと思いますが小生にはそれがございません。航海の経験がほとんどなく、船酔いを起こし、またひどいリュ

ウマチのゆえ航海のできる体調ではありません。小生が幾度となく閣下に申し上げ、また書簡にも述べて参りましたのでご承知でもございましょうが、小生は窮乏の極みにありますがゆえ、マドリッドへ上洛するにも借入をしなければなりませんでした。わが家には 90 万ドゥカードの借財があり、イギリス遠征に 1 レアルなりとも融通がきかないのであります。これに加え、かくも壮大な作戦であり重要な計画でありますれば、海上の経験も戦闘の体験もない者がこの任務を拝受するのは、小生の良心と義務にかけて肯んじ得ぬところであります。陛下に抱く奉仕と愛にかけて閣下にこれを申し述べますのは、小生がこの遠征作戦に臨んで体力と健康にすぐれず、財力においても及ぶところがなく、これらのいずれかに不足があっても辞退いたすべき所を小生はそのすべてに欠いていることを伝えて頂きたいからであります。そのうえ、艦隊編成や人員の構成、作戦についても知識がなく、イギリスの情報や諸港の状況を知らず、サンタ・クルス侯が長年にわたって培ってきた知識もないまま、にわか仕立てで職務に就きますことを思えば、たとえ深い経験があったとしても手探りで進まねばなりますまい。ですから、閣下、小生の申し上げる理由はすべてにゆるぎなく、よって艦隊に勤務いたさぬ方が陛下への奉仕になるものと心得ます。いずれが正しくどちらが過ちなのか、誰が小生を欺き蹴落とそうとしているのかもわからず、他者の言うままにしたがってすべてに手探りで進むなら決してよい結果をもたらさないのであります。

この任務に適する人物がございます。言わせて頂くならば、サンタ・クルス侯の顧問委員はそのままに残して、カスティーリャ前線総督が信頼できましょう。この人物なら（カスティーリャ）艦隊を出航させてリスボン艦隊と合流させることができます。理性にすぐれてよきキリスト教徒であり、海に詳しく海戦と陸戦の経験も豊富でありますれば、主な

る神の大いなる援助がございましょう。このとおり閣下の最初のお手紙に虚心坦懐にお返事申し上げる次第でございます。偉大なる陛下は、小生の伏して願うところをお聞き入れ下さり、知識も理解もなく、海上には健康が許さず、財政も及ばぬがゆえに決して良き結果を生まない職務に小生をおつけにはなりますまいと考えます[19]。

当地のガレオン船は、8日づけ書簡の歩兵部隊が到着次第に出発いたします。アントニオ・デ・ゲバラの報告では3月15日までには出発できるようであります。レバント船4艘はガレオン船と同行するのを待っています。サン・ビセンテ岬のイギリス海賊の状況から出航は控えております。10日にアルガルベの総督から小型船22艘があちらにいるとのこと、上陸した水夫の情報では、ドレイクの船30艘が来るのを今週中待っているのだと分かりました。ガレー船が艦隊に同行するのは申したように重要かつ必要であります。陛下の申される通り、スペインのガレー船から4艘を選ぶのがよろしいでしょう。リスボンの8艘と加えて12艘となって大きな援助勢力となりましょう。1588. 2. 16[20]」

これがかの有名なメディナ・シドニア公の断り状の全文である。300年後にシマンカス古文書館でこれが発見されたとき、歴史家はこの書簡をふりかざしてメディナ・シドニア公の臆病さを指弾した。だがこれを文面通りに受け取っていいものかどうか疑問が残るし、考えようによってはこれだけの断りをフェリペ2世に向かって述べるには相当に勇気のいる行動であるとも言えるだろう。あくまでも儀礼的な断り状の可能性もあるが、ともかく国王陛下の意を受けたイディアケスが20日に返信を認める。メディナ・シドニア公の力量を率直に評価して、いろいろと不都合もあるだろうがどうか艦隊指揮を引き受けてくれるようにと述べてこう続ける。

「陛下が貴殿に記された書簡に留意なされ、陛下が貴殿に寄せ給う信頼を好機ととらえてくださるよう願う次第であります。…これを拒否することは、陛下の御心を疎んじ、国家への名誉を忌避することであります。海については貴殿ほどの知者はないのであります。かくも壮大にして重要な計画に従事できる人物は貴殿をおいてほかにありません。1588. 2. 20 [21)]」

艦隊総司令官への使命を神の声と心得て出撃を考えて頂きたいと説得する国務長官だが、実はこれに先立つ 16 日の書簡に続いて 18 日にもメディナ・シドニア公から国務長官イディアケスとモウラに宛てて再び断り状が届いていたのが次の書簡から分かる。

「本 18 日づけ貴書簡を拝受しました。事態を鑑み、またすでにおおやけになっていることでもあり、貴殿の述べておられる内容を陛下に伝える勇気がありません。先の書簡に記した理由を勘案くだされて、貴殿の拒絶なさっている職務ならびに現在の状況を考慮なさり、神への大いなる奉仕である艦隊の件に関してわれわれを失望させることのなきよう。さらに申しますなら、貴殿が選ばれたのは、神と国王への深甚なる奉仕の意志を確信してのことであります。現在、世のひとびとが貴殿に抱いている評判と名声の維持継続がそこにかかっており、貴殿が認(したた)められた当方への書簡内容をひとびとが知ることになり（安全に保管してありますが)、さらにそれを推し進めるときには、貴殿の名誉を危機にさらすこととなりましょう。1588. 2. 22 [22)]」

興味深いこの原書簡の行方が知れないままになっている。メディナ・

シドニア公の断り状があまりに頑なで不敬な文面のゆえに筐底の奥深くへしまい込んだか、あるいは国家の政策に批判がましい意見を述べるがゆえに思わず火に投げ込んだか、いずれにしても国王の目に触れるのを憚って国務長官が握りつぶしてしまったのは明らかである。長官二人がフェリペ2世へ奏上するのを躊躇した内容とは正確にはどのようであったのか。おそらくは艦隊総司令官の辞退に加えてイギリス遠征派遣の中止と和平交渉の開始を提言していたのではないかと推定されている[23)]。しかしメディナ・シドニア公の大西洋艦隊総司令官指名はすでにマドリッドでは公然の秘密となってしまっていた。もはや神の意志としてこれを受けるしかない。さもなくば名誉を失うことになるであろう。当時の貴族が命より大切に思う名誉である。国務長官達としては神懸かりと脅しとで説得するしかなかったのであろう。では、メディナ・シドニア公の断り状にたいするフェリペ2世本人の反応はどのようであったのか。

「貴殿がイディアケスへ記していることはすべて大いなる謙遜からと心得る。貴殿の充分なる資質に余は不足を感じていない。海に出るとそこなうと言う健康は、任務につけば神が恵んでくださるであろう。貴殿が懸念を抱くところは誰にでも起こることである。先の書簡のすぐあとに14日付けのが届いたであろうが、そこに処方を記しておいた。貴殿を選んだについては時間がないのと余の信頼とからであると分かるであろう。この考えにもとづいて後任を公表し、ポルトガルとフランドルへ知らせておいた。神にすべてをまかせ、ぬかりなきようこの決定を公表した。貴殿の手腕と神の援助に導かれると信じる。…貴殿は出来るだけ迅速に陸路をリスボンへ向かうよう。主を失った全艦隊が貴殿のすみやかなるリスボン到着を待っている。このことを貴殿に命じ、艦隊派遣意図のすべての詳細と指揮の次第とわが甥パルマ公との連絡手段について

は、指示書と注意事項が戦略会議からリスボンへ届いているだろう。…1588.2.20[24)]」

37歳の第七代メディナ・シドニア公爵ドン・アロンソ・ペレス・デ・グスマンがスペイン大西洋艦隊総司令官の職を拝命するに至ったのは、このようなやりとりを経た後のことであった。総司令官職を辞退する深刻な理由が縷々述べられているのだが、フェリペ2世には全くと言っていいほど通じていないのがわかる。積年のリュウマチに苦しめられてこの病を熟知しているフェリペ2世が親切にも処方箋を記し、全幅の信頼を寄せてメディナ・シドニア公を艦隊司令に任命しているのである。有無をも言わせぬ命令である。もはや拝命するしかないだろう。2月26日にメディナ・シドニア公は国王に艦隊総司令官職を受諾の書簡を認めることになるのである。

5.

リスボンを出帆して最初に船酔いにかかったのがメディナ・シドニア公だったとの笑い話があるが、後世に作られた話であろう。なにしろ地中海と違って大西洋の荒海に乗り出すのだから実際にはほとんどの兵隊が船酔いに苦しめられ、年を経た水夫でもその例外ではなかったと言われる。船酔いの言い訳は誰にでもあることだと一笑に付されている。リュウマチと痛風にも悩まされているが、それを言うならフェリペ2世の症状はもっとひどかった。若い頃から痛風とリュウマチに苦しめられ、60歳になる今では膝に水が溜まって歩行が不自由、手の指は激痛に襲われてペンを執るのもままならない。今は執務室を這うようにして動いているが、やがては寝たきりとなり10年後にはそれがもとで崩御するのである。この病気に通暁しているフェリペ2世に向かって37歳の若

造が、リュウマチのせいで船に乗れないなどと言っても通用するはずがなかった。散佚してしまった14日の書簡に「処方を記しておいた」とあるのも興味深い。スペイン艦隊が北海を抜けて帰還の途上、飢えと渇きに苦しめられ、ほとんどのひとびとが壊血病、チフス、熱病に倒れ、陸にあがってからも多数が死んでいった。メディナ・シドニア公もその例外ではなく、20日以上も熱病と下痢に呻吟し続け、動きもままならぬ状態でサンタンデールへ担架で担ぎ上げられたのだった。しかし間もなく快復して故郷のサンルカルへ戻り62歳まで長寿を保ったのである。リュウマチが悪化した様子もない。あれだけの悪条件を耐え抜いて帰国した数少ない中に含まれていたことを思えば、37歳の若さもあるだろうが、皮肉なことにひと一倍頑健であったと言えるのかも知れない。

次に財政に困窮して90万ドゥカードの借財があると言う。当時、このような国家への奉仕には私財を提供して消費するのが普通であったが、メディナ・シドニア公は鐚一文も出費の余裕がないと言うのである。だがメディナ・シドニア公はカディス沿岸のマグロ漁と加工販売を一手に握っており、スペインでもっとも裕福だと定評のある貴族だった。ややもすればフェリペ2世より裕福であったかも知れないと言われる。しかも当時の貴族にとって借財はあたりまえである。フッガー家からの借財で2度も国家的破産を体験しているフェリペ2世を前に、わずか90万ドゥカードばかりの借金では説得の材料になり得なかった。

このふたつに比べて少しは現実味を持つのが、イギリス遠征艦隊についての知識がないという最後の理由であろう。しかしこの弁明にはフェリペ2世でなくとも「そんなはずはあるまい」と言いたくなる。サンタ・クルス侯の艦隊編成計画に沿って艦船を徴発してカディス湾へ集結させ、必要な兵員と水夫をアンダルシアで徴募して管理配分する困難な仕事に従事していたのは誰だったか。艦隊を養う6ヶ月分の食糧と飲料

水、そればかりか艦船の艤装、大砲、火薬、その他諸々の雑事を管理統制してリスボンへ搬送する指揮を取っていたのはメディナ・シドニア公に他ならない。その最中にドレイクのカディス襲撃事件がおこり、サンタ・クルス侯をリスボンから迎撃させるため急ぎ兵員を集めてリスボンへ送らねばならなかった。そのためにメディナ・シドニア公が八面六臂の活躍をしてフェリペ2世から大いに感謝され、信頼をいっそう厚いものにした経緯はすでに述べたとおりである。それに先だって、イギリス遠征についての意見をフェリペ2世から求められ、マドリッドへ上洛して会議に加わり、必要なガレー船の数や作戦についての進言もしているのである。先の書簡でも、闇の中を手探りで進むようなものだからと断りながら、そのすぐ後にガレオン船の集結状態やガレー船の重要性を説いていた。これまでの艦隊準備の経過を見てメディナ・シドニア公に絶対の信頼を寄せているフェリペ2世にすれば「イギリス遠征艦隊の編成や人員の構成、作戦の知識がない」と言うのは「貴殿の大いなる謙遜」としか思えないのは当然である。メディナ・シドニア公が艦隊のことを何も知らないなら他に誰が知っているというのか。「イギリスの情報、イギリスの港湾の知識もない」というのはフェリペ2世にしても同じ事である。国交を断絶しているイギリスからの情報は、遠くパリのベルナルディーノ・デ・メンドサ大使を迂回してしか入ってこない。それもスペインに都合のいい情報ばかりが届くので正確なイギリスの国状を把握できていなかったのである。イギリス港湾の知識は急遽スパイを放って調査をさせたけれど不完全であり、航海図にしても満足なものがまだなかった時代である。むしろイギリス商人と盛んな通商交易を行って利益をあげているメディナ・シドニア公の方にこそイギリスの国状と港湾に関するはるかに正確な知識があったのである。

6.

遠征艦隊の準備には莫大な経費を必要としてきた。それでもまだこの先どれだけの費用がかかるのか見当もつかない。130 艘の艦隊がリスボンに停泊しているだけではイギリスに対して何らの威嚇にもならないばかりか、毎日 3 万ドゥカードを無駄に消費していることになる。これを一刻も早く港から引き出して大西洋に浮かべて貰いたいのがフェリペ 2 世の真情である。それにはメディナ・シドニア公の管理能力と財力が物を言う。誰にもまねの出来ない手腕をもっているのはドレイクの襲来以前からすでに証明済みである。困窮に喘いでいるフェリペ 2 世が、メディナ・シドニア公の財政管理能力に絶対の信頼を置いているのが次の書簡にも明確に現れている。

「国庫にたいする貴殿の絶えざる努力は余が身をもって体験しているので、艦隊にかかわるすべての派遣問題において貴殿が艦隊で搬送する資金を出来る限り節約してくれるものと大いに期待している。資金を集めるのにどれほどの苦労があるか、そこから生じる窮乏、そして徴募が行われて兵員の数に不正がなされないように留意しなければならないのは貴殿もよく承知の所である。これは遠征だけの問題ではなく、しばしば作戦の成功を左右する問題である。貴殿は食糧の質とその保存と分配にとりわけ留意されたい。そうすれば時期が来る前に窮乏したり不足することもなく、兵員の健康維持はいつにこれにかかっているのである。あらゆる分野に渡る任務の士官たちに落ち度なく目配りをして貰いたい。そうすれば貴殿の監視の目が彼らを発憤させ、艦船のそれぞれが任務への意識を保持できるのである[25)]。」

フェリペ 2 世は、130 艘の大艦隊を率いて戦場でイギリス艦隊を撃破

することをメディナ・シドニア公に求めているのではないのがわかる。海の古強者であったサンタ・クルス侯の後任に37歳の未熟なメディナ・シドニア公を選んでいきなり大決戦の総指揮を任せるのはどだい無理な話である。それぐらいの見識はフェリペ2世にもあったはずだ。不可解なことに、これだけの壮大な遠征計画を立てながらフェリペ2世は、リスボンへ足を運んで幕僚たちと作戦会議を開くことをしなかった。カディスへ赴いて艦隊の集結状況を自分の目で視察することもなかった。さらに言うならパルマ公とサンタ・クルス侯を交えて意見の交換をすることすらなかったのである。もちろんメディナ・シドニア公とも会っていない。父王カルロス5世と違って戦わない国王だったフェリペ2世は、陸戦の経験すらほとんどないと言っていい。しかるに現場の状況を見もせずにエスコリアル宮の執務室から分かりきったような細かい作戦指令だけは矢継ぎ早に送ってくる。サンタ・クルス侯のごとき船の上で育ったような海戦の勇者には小うるさい限りであった相違ない。逆にフェリペ2世からすれば扱いにくかったかも知れない。実際、扱いにくかった。例えば、冬場の荒海に艦隊を出撃させるのは常識に反する暴挙であると考えて、フェリペ2世がなんと言ってなだめ脅かそうともサンタ・クルス侯はがんとして動かなかった。それに比べてメディナ・シドニア公は37歳の若輩者、フェリペ2世と同じく海戦の経験はない。だから差し出がましい口を挟んでこない。マドリッドの指令どおりに動く。航海参謀にはイギリス海峡を知っているフローレス・デ・バルデス、陸軍参謀には古強者のボバディーリャをフェリペ2世の命により両脇に配置してある。しかも敵との戦闘に関してはレパント海戦以来のあらゆる戦火をくぐってきたレカルデ、レイバ、オケンドの勇者が周囲を固めている。スペイン軍隊としては最良の人材配置である。ひとたび艦隊が進撃を始めればメディナ・シドニア公がなさねばならぬ事は少ない。船は風が運

んでくれる。戦闘はレカルデ、レイバの勇者に任せておけばいい。総司令官はその麾下の軍隊にとって鑽仰の的であればよかったのである。そしてスペイン随一の貴族であるメディナ・シドニア公こそはそれにふさわしかった。フェリペ2世の指令を厳守してよけいな戦闘を行わず、パルマ公のもとへ6000の兵隊を無事に届けるだけでいいのだ。それ以上のことはむしろしないほうがいい。フェリペ2世はそのように考えて経験のないメディナ・シドニア公を艦隊総司令官の重責につけたと考えられる。実際にメディナ・シドニア公は、フェリペ2世の作戦指令を金科玉条のごとくに遵守してひたすら艦隊をダンケルクまで運んだのだった。老将サンタ・クルス侯が総司令官ならこうはいかなかったであろう。まさにフェリペ2世の思惑どおりになったのである。「作戦についても無知である」との弁明が通用しなかったのはもちろんである。むしろその方がフェリペ2世には都合がよかったのである。

後世の歴史家はメディナ・シドニア公の選出をフェリペ2世の失策であったと言うが、それはメディナ・シドニア公の断り状から無能で臆病な司令官だと決めつけるからである。だがメディナ・シドニア公は戦闘が恐ろしいわけでも命が惜しいわけでもなかった。根拠をあげて自分は総司令官に適任ではないと述べているのである。しかるにその根拠にまったく説得力がなく、一応の礼儀としてひとまず辞退したかに見える迫力に乏しい文面であった。従兄弟であるフェリペ2世の一徹な性格を古くから承知のメディナ・シドニア公自身、あの断り状で国王が決定をくつがえすとは思っていなかったであろう。フェリペ2世がメディナ・シドニア公を総司令官に選んだのは作戦遂行のためには正しい判断であったと言えるのである。

注

1) カディスを襲った艦船数については27艘、24艘、22艘、17艘と諸説があって確定できない。ロンドンのスパイからの報告で「4月11日に34艘でプリマスを出港した」とあるが、副官ウイリアム・バローがカディス攻撃に反対して参加しなかったので27艘以下であったと思われる。肝心のドレイク自身は報告書に艦船数を記していない。
Calender of Letters and State Papers, Vol. IV. Elizabeth, 1587–1603. 75. Martin A.S. Hume, London, 1899.

2) この間の相次ぐ報告書の詳細は前掲書 *Calender of Letters and State Papers* の 63. 65. 66. 67. 75. 72 を参照

3) イギリスとスペインとの国交が断絶されていたため情報はすべてパリのベルナルディーノ・デ・メンドサを経由しなければならなかったので必要以上に時間を要した。

4) *THE GREAT ENTERPRISE, The History of the spanish armada*, p. 38. Stephen Usherwood, Bell & Hyman, London, 1982.

5) Martin A.S. Hume, London, 1899.　ibíd., 86.

6) Stephen Usherwood, Bell & Hyman, London, 1982. ibíd., p. 39　なおイギリスはユリウス暦を使用していたのでグレゴリオ暦では10日を加えなければならない。

7) Stephen Usherwood, Bell & Hyman, London, 1982. ibid., p. 42

8) 14.「ドレイクが1587年4月29から30日にかけてカディスで焼却ならびに沈めた船の報告書」*LA ARMADA INVENCIBLE*, tomo 2, Cesáreo Fernandez Duro, Madrid, 1885.

9) 「フランシス・ドレイクからジョン・フォックスへ、1587. 4. 27」Stephen Usherwood, Bell & Hyman, London, 1982.

10) 「フェリペ2世からベルナルディーノ・デ・メンドサへ、1587. 6. 26」Stephen Usherwood, Bell & Hyman, London, 1982.

11) *LA ARMADA INVENCIBLE*, tomo 1, p. 345.　Cesáreo Fernandez Duro, Madrid, 1885.

12) 「イギリスからフェリペ2世へ報告 7. 16」*La Armada Invencible, 1587–1589 : documentos procedentes　Archivo Histórico Español*. Herrera Oria, Enrique, Valladolid, 1929.

13) *LA ARMADA INVENCIBLE*, tomo 1, 22. Cesáreo Fernandez Duro, Madrid, 1885.

14) ibid., 24.

15) ibid., 28.

16) ibid., 33.

17) *La Armada Invencible, 1587–1589 : documentos procedentes　Archivo Historico Espanol*.

Herrera Oria, Enrique, 83. Valladolid, 1929.

18）ibid., 84.

19）メディナ・シドニア公は総司令官にカスティーリャ前線総督サンタ・ガデア伯爵を推薦している。だがこの人物については戦略会議で名前すらあがらなかった。サンタ・クルス侯自身は後任にアロンソ・デ・バサンをつけたかった。実の弟であるがさしたる武勲もなく、他の司令官達を越える人物ではなかった。サンタ・クルス侯の副司令官を務めているフアン・マルティネス・デ・レカルデが自ら名乗り出た書簡が残っている。経験豊かな老将であるがそれほどの功績はなかった。「軽騎兵のように船を操った」と言われるオケンドはヘクトルのごとくに勇猛果敢であったが総司令官の器ではない。実はフェリペ2世は、メディナ・シドニア公に不慮の事故のあるとき、ミラノ軽騎兵隊総司令官アロンソ・デ・レイバに艦隊の指揮をとるよう極秘の指令を出していた。信頼に足りる立派な武将には違いないが、フェリペ2世の私生児アスコリ公の従兄弟であったのも影響しているかも知れない。いずれにせよメディナ・シドニア公の周辺で彼ほどに艦隊に詳しく、財力があり、すべてを統率する管理能力にすぐれた人物は見あたらないのである。

20）Cesáreo Fernandez Duro, ibid., 53.

22）Herrera Oria, Enrique, Valladolid, 1929. ibid., 88.

21）ibid., 90.

23）スペイン艦隊がコルーニャへ入ったときにメディナ・シドニア公からフェリペ2世に艦隊派遣中止を進言する極めて直裁な文面の書簡が出されている。ほぼこれと同様の趣旨でなかったかと言われているがもちろん確証はない。

24）ibid., 89

25）*The Spanish Armada*, Felipe Fernandez-Armesto, Oxford Univesity Press, 1988. p. 104